

ウォルター＝クレイン作

# 「イギリス帝国地図」

神戸市外国語大学 名誉教授 指 昭博 (さし・あきひろ)

「イギリス帝国地図」については、p.206をご覧ください。



そのほかにも…

- ・『最新世界史図説  
タペストリー 二十一訂版』  
巻頭5
- ・『明解 歴史総合図説  
シンフォニア 初訂版』p.76

## || 1 || 絵画資料を読み解くおもしろさ

歴史学は伝統的に文字で書かれた史料を中心に発展し、研究が積み重ねられてきた。かつては考古学の発掘の成果ですら、文字を伴わない場合、低く見られていた。絵画をはじめとする視覚資料も、補助的な資料として挿絵などには用いられても、それ自体が「史料」として読み解かれ、活用されるようになったのは、比較的新しいことになる。

視覚資料が豊富な情報を持っていることは、それぞれ「一目瞭然」であるが、その活用には注意すべき点も多い。まず、そこに描かれていることがどれほど信頼できるのか、作者の創作や空想が入っていないか。文字どおり「絵空事」ではないのか、ということである。もちろん、これは文字資料でも同様で、そこに記載されているからといって無批判に信じることはできない。他の資料による検証が必要となる。

「虚構」が描かれたり、述べられたりすることも多いが、虚構であるからといって資料として無価値とは限らない。その虚構の背後にある「意図」を読み解くことで、表面に描かれた以上の深い情報を知ることが可能である。

## || 2 || 「イギリス帝国地図」に描かれたもの

ここに掲載した資料は、ウォルター＝クレインの「イギリス帝国地図」である（[図1](#)）。挿絵を多数掲載し、ビジュアルを重視した誌面構成の週刊雑誌『グラフィック』の1886年7月24日号に付録として添付され刊行された。横84cm、縦62cmのかなり大きな作品である。「インドと植民地の博覧会」がこの年にロンドンで開催されたのに合わせた企画であった。

実にたくさんの情報が盛り込まれており、しかも人気イラストレーターであったクレインによる描画が魅力的である。限られた紙面ですべてを網羅することは無理だが、いくつか注目すべき点や印象的な部分を取り上げてみたい。

まず、この地図はグリニッジを通る子午線を中心にした世界地図となっている。現在では見慣れた図様だが、グリニッジを通る子午線が本初子午線（0度）となったのは、1884年の国際子午線会議（アメリカ合衆国のワシントンD.C.で開催）においてで、この地図が描かれる2年前である。イギリスを通る子午線を中心軸にした地図は、イギリスの地位を誇示するものとして受け止められただろう。

そして、イギリスの支配する範囲が赤く色づけられている。それは全大陸にわたり、まさに「日の没することのない」帝国であることが可視化されている。シベリアの辺りに小さな地図が挿入されているが、そこには、100年前の1786年のイギリスの支配地域が示されている。この100年でいかにイギリスの支配地域が拡大したのかも一目瞭然である。また、随所にさらに小さな枠が設けられ、その地域の人口や面積、貿易額などのデータが記されている。イギリスと各地を結ぶ航路も描き込まれ、世界経済の中心たるイギリスの面目躍如といったところだろう。

しかし、何よりこの地図の魅力は周囲に配されたイラストにある。まず中心には、イギリスを女神に擬人化した「ブリタニア」が、ギリシア神話のアトラスによって支えられた地球の上に鎮座している。「世界に冠たるイギリス」を明快に示しているが、その両脇にはインドやオーストラリアなど、植民地を象徴する人々や事物が置かれている。画面左端の装飾として、カナダを中心とする北米大陸を示すモチーフが描かれている。この地図が「インドと植民地」をテーマにした博覧会に向けて描かれたことがはっきりと示されている。

他方、画面右端に描かれているのは、イギリスの支配とは直接の関係が薄いように見える「飲み物」にまつわるモチーフである。上から大麦（ビール）、茶の木、ぶどう（ワイン）が女神像とともに描かれているが、茶を表象しているのは日本女性である。われわれの目には、着物の様子がおかしかったり、イヤリングをしているな

ど、いささか表現に疑問もあるが、当時のイギリスで一般的であった「日本イメージ」に沿った表現になっている。ワインの女神の手もとには現在もオーストラリアやニュージーランドの国旗に描かれている南十字星が置かれ、イギリスとのつながりも意識されている。

### || 3 || 描かれた背景と当時の世界情勢

この地図の掲載誌の名称が『グラフィック』であるように、ビジュアルな大衆メディアの存在を可能にしたのは、精密な描写が可能な木口木版や石版印刷、写真技術を多数の印刷に活用できるようになったことが大きい。

当時の社会の様子を示す図版を収めた絵入りの定期刊行物として、1842年に創刊された『絵入りロンドン・ニュース』（週刊）がよく知られるが、それ以前の定期刊行物にビジュアルな要素がなかったわけではない。18世紀の雑誌にも挿絵はあったが、ただ掲載数は格段に少なかった。他方、イギリスでは、18世紀から版画メディアが政治や社会の風刺を取り上げて人気を得ていた。特にフランス革命からナポレオン戦争期に数多くの作品が世に出されている。こうした流れの背景には、ビジュアルな図版を多用できる印刷技術の改良や発明があり、それを支えたのが産業革命であった。鉄製の印刷機や蒸気機関で動く印刷機は印刷可能な部数を飛躍的に伸ばし、より多くの人々に印刷物を届けることを可能にした。さらには多色刷りの印刷物を大量に生み出す技術も発展し、この地図のような作品も家庭に届けることができるようになっていた。

この図が発表された1886年は、翌年にヴィクトリア女王の即位50年記念（ゴールデン・ジュビリー）を控え、グラッドストーンが3度目の内閣を組織している。地図のアフリカに「赤色」地域が少ないのは意外かもしれないが、列強によるアフリカ分割が進む前の状況を示している。この後まもなく、アフリカ諸地域は次々と植民地化されていく。

また、この1886年、クレイン自身はフェビアン協会に加入している。クレインは近い関係にあったウィリアム・モリスの影響もあって、社会主義に共鳴し、以前から労働運動を支援する作品を発表していた。この地図にも、上部にそういったクレインの立場がしっかりと刻印されている。「自由」「友愛」「同盟」と記されたバナーを持った女性が描かれているが、女性はみな赤いフリギア帽



図1 「イギリス帝国地図」  
『グラフィック』1886年7月24日号付録

をかぶっている。フランス革命以来の革命理念を象徴するアイテムである。女性たちの中には、平和を象徴するオリーブの枝をくわえた鳩も描かれている。

社会主義とイギリス帝国がクレインの中でどのように結び付いていたのか。クレインの労働運動支援の他の作品がヒントとなるだろう。図2はメイ・デーに寄せて「労働者の団結」を訴えたものだが、ヨーロッパ、

アジア、アフリカ、アメリカ、オーストラリアの各大陸の労働者が自由の女神の下で手を取り合っている。そこには地域間の上下関係は意識されていない。社会主義の理念を全世界の人々と共有し、あらゆる人々が自由で、助け合って連帯できる世界に進む。現在の視点からはいささか楽天的とも思えるが、クレインはそうした理想を胸にこれらの作品を描いているのは間違いない。

ただ、今日では、そういった理想自体が支配する側の思い上がり、おごりであると批判することもできるだろう。進んだ文明国であるヨーロッパが、遅れたアジア、アフリカを「指導する」という意識は、当時のヨーロッパに広がっていた。クレインにはそうした優等意識は強くなかったと考えられるが、作者の意図はひとまず置いても、この地図を見た雑誌の購読者はどのように感じただろう。19世紀末という時代、社会主義運動、そして人々の帝国意識。それらの関係を考えるうえで、示唆に富む作品であるといえる。



図2 「労働者のメイ・デー」  
『労働運動のための時事画集』1896年